

[33] radix : 九州大学全学共通教育広報

<https://hdl.handle.net/2324/20398>

出版情報 : radix. 33, 2002-09-30. 九州大学教養部大学教育研究センター
バージョン :
権利関係 :



radix

radix (ラーディクス) は、根、
根源を意味するラテン語。ヒト
の根源にまなざしを向け、豊か
なこころの根を広げたい。

2002. 9. 30
九州大学全学教育広報 No. 33



「焼け石に水」作戦 (2頁参照)

世界・日本	14	3
学部ゼミと六本松での勉強		6
女だらけのおしゃべり大会		10

表紙写真説明

「焼け石に水」作戦

安東 毅

諫早湾を締め切る何十枚もの鉄板、つまり“ギロチン”が一気に落とされたのが1997年の4月でした。この写真は、その年の7月に干拓造成地で撮ったものです。その頃造成地では、写真にも見られる干割れの底の土はまだ湿ったままで、ムツゴウロやカニなども死なずに動き回っていました。

そこで、在福の「博多湾市民の会」などいくつかの環境NGOが、「焼け石に水」作戦なるものを行いました。それは博多湾の海水を詰めたポリタンクを諫早干拓地へ持ち込み、それら生き物へ“干天の慈雨”として撒きかけようというものでした。当日は10個ほどの海水入りポリタンクを積んだバスが、ほぼ満席で早朝に博多を出発しました。バス代は各自負担というのに、若者が意外に多くみられました。そして、諫早市隣接の森山町前の造成干拓地で、博多湾の海水を柄杓で撒きました。この写真は、その時のスナップです。

約3500haの干拓造成地で干涸びて死ぬのを待っていた生き物は、恐らく数億体以上だったでしょう。それに比べれば、私たちが撒いた海水はまさに“焼け石に水”でしかありませんでした。しかし、理不尽な人間の行為の下でただ死を待っている生き物たちを見た、私たちの「少しでも償いを」という気持ちがこのささやかな行動となったのです。

諫早干拓をめぐる人間か自然か、開発か自然保護かの不毛な対立よりも人類の持続的な存続を視野に、湿地や干潟の賢明な利用 (wise use) への具体的な道を模索すべき時ではないでしょうか。 (九州大学名誉教授)

世界・日本 14

韓国に留学して.....富田 由衣... 3

日本の大学の魅力

ティップワン・コーチャクラン... 4

学部ゼミと六本松での勉強.....西田真季子... 6

大学で勉強するという事.....志波 文彦... 8

高大合同のゼミナールを通して.....藤澤 義貴... 9

女だらけのおしゃべり大会...女子学生グループ...10

「雄飛」の名のもとに

～田島察生、博多の街を翔る～.....12

サークル紹介 25

『♪一声入魂♪』.....山下 智子...14

九州大学テコンドー部紹介.....荒田 康弘...15

保健室で垣間見る最近の九大生.....丸山 徹...16

基礎化学科目の教育について.....川東 利男...18

六本松に帰る.....星子 奈美...20

新任教官自己紹介

秋元 忍・石川 巧.....21

植田 好道・佐藤 正則.....22

鶴田 昌之・福留 留美.....23

投稿・写真歓迎

編集委員会ではradixへの投稿、紙面を飾る写真を募集しています。あなたに関わっている様々な活動、六本松地区や「全学教育」にまつわる出来事、六本松の思い出など、六本松や「全学教育」に関するものであれば何でも結構です。

表紙写真も、キャンパスでのもの、旅先でのものをはじめ、あなたの作品、ぜひ紹介したい知り合いの作品など、広く募集しています。応募、推薦の対象は六本松や「全学教育」に関わりのある全ての方です。

radix 学生モニター募集

編集委員会ではradixに対する学生の意見を・要望を聞くためにモニターを募集しています。また学生編集委員も募集しています。募集は常時行っています。

投稿、写真、学生モニター・編集委員の応募は下記で受け付けます。

編集委員	甲斐 貞子 (歯学☎91-6447)	加来 祥男 (経済☎99-2487)	金子 秀男 (事務部☎4504)
	小山 紘三 (大教セ☎4585)	田中 健夫 (大教セ☎4802)	谷口 秀子 (言文☎4682)
	中屋敷 厚 (数理☎4784)	花村 昌樹 (数理☎99-2738)	丸山 徹 (健セ☎93-7863)
	山下 潤 (比文☎4541)	※局番の無い電話番号は六本松地区です。他地区から電話をする場合には頭に局番98を付けてください。	

企画掛 ☎4525・4526 本館1階西側



韓国に留学して

文学部4年 ^{とみ た ゆ い} 富田由衣

私は2001年9月から2002年6月まで韓国ソウルにある梨花女子大学に留学しました。梨花女子大学と言えば、お嬢様学校として有名で、お化粧品ばっかり、黒いスーツ、ヒールを履いた学生がうようよいる雰囲気になかなかはじめませんでした。女子大らしく、四季を通じて様々な花や木々が手入れされ、明るく華やかな学校です。大学周囲は観光本にも載るショッピングのメッカで、美容院とブティックが軒を並べています。この目の前の繁華街で梨大の学生は遊んでばかりいるのではないかと思われがちですが、客はほとんど外部からの客で、梨大の学生はほんとに良く勉強します。図書館も24時間開いており、卒業するのにトフルの点数とパソコンの資格が必要だと言います。女子大なので、女性学が有名であり、共学と違って、男子学生の役割も女子学生がするから、梨花女子の学生は強いよ、と友達が言っていました。今度梨大の学長が韓国で初めての女性首相に推薦されたのはご存知の方も多いのではないでしょうか？ この大学に滞在し、過ごした10ヶ月間の中で感じた意外だった韓国のあれこれを書こうと思います。

人との関わり方

全人口の4分の1が集まるソウルでは、人と車がほんとに多く、繁華街を歩くと、しょっちゅう人と肩がぶつかります。そんなとき、「すいません」と私が振り返ってもたいていの場合、相手方はスタスタと何もなかったように過ぎ去っていきます。最初はショックでしたが、何でも「早く、早く！」という韓国の性質とこの人口密度の高さを原因として納得しました。他人へのマナーではこのようにちょっと冷たいなと感じることもありましたが、友達などの関係ではかなり奥深いつきあいです。寮では「私のものはあなたのもの、だからあなたのものも私のものね！」と共同利用がよくあり、ちょっと仲良くなれば親密な話をすることに驚きました。

インターネット

パソコンの普及率が高く、大学でも建物ごとに設置してあり、授業の履修登録から図書貸し出しの延長などなどインターネットで処理することが多いです。町にあるPCバンというインターネットカフェでは利用料金1時間100円ぐらいで、いつも多くの人がゲームやチャット（知らない人とチャットして、友人、恋人を探す）をし、インターネット中毒という社会問題にもなっています。インターネットを通じて日本の音楽やアニメもたくさん鑑賞でき、日本文化規制など関係ないなと感じました。

勉強熱心さ

テレビ番組で韓国と日本の高校の授業風景比較があり、授業中居眠りする韓国側と元気に授業を受ける日本側を比べ、韓国も日本のようにゆとりのある高校生活にしようというものでした。なぜなら韓国では高校3年生になると朝の6時から夜12時まで学校で勉強し、寝る暇がなく、授業中に居眠りしてしまうほどだからです。英語に対する熱も日本より高いと感じました。大学を休学して語学学校や留学に行く人が多く、早期英語教育として家族で移民をする人、子供が米国市民権を得るために妊婦の米国出産ツアーというものであるのには驚きました。良い会社に就職するため、良い大学に入るためという強い構図を感じました。

その他いろいろ興味深いことを発見した10ヶ月でした。留学は異文化体験はもちろん、自分の文化を外から見ることもでき、なによりいろんな人と出会える素晴らしい機会です。バックグラウンドが違ういろんな人が集まった留学仲間と、日本とは違う環境の中で生活し、刺激的な日々でした。留学に興味がある人はぜひ九大の交換留学プログラムに挑戦されることをお勧めします。

世界・日本



日本の大学の魅力

経済学部4年 ティップワン・コーチャクラーン

はじめに

私は生まれ故郷であるタイを離れ来日してから、今年で8年になる。留学にしてはかなり長い方だが、この8年間、他の国で決してできない、貴重な体験をしてきた。休みを利用して、日本国内を旅行し、現地の人たちの生活・習慣に触れたり、日本語学校のととき、学校側が開催した夏休みのホームステイに参加し、静岡県清水市に3日ばかり、日本の家庭に滞在したりしたこともある。それらの経験からわかったことは、同じ日本国内でも、言葉や文化はもちろん考え方で異なっている地方もあるということだ。私は4年ほど東京で生活していたが、九州に来て特に言葉の違いを肌で感じた。九州弁は私にとって新鮮だった。しかし、そのときは、初めて日本を訪れたときはまた少し違っていった。なぜなら、来る前に九州はどのようなところなのか少し想像ができたからだ。8年前初めて日本に来たときは、私にとって日本が未知の世界であり、どう想像してもとても想像のつかないものであった。このような体験を、留学生あるいは海外旅行をした経験を持つ人なら、誰でもしたことがあるのではないかと思う。

九州大学に入学して、まずは留学生の数の多さに驚いた。他の大学と比較すれば少ない方かもしれないが、少なくとも私にとっては驚くべき人数であった。九州は日本の中で最もアジア（いうまでもなく日本もアジアの一部である）に近い場所だからでもあり、特に中国や韓国からの留学生が多い。タイの留学生も20人ほどで、決して少なくはない（学部の勉強には日本語が非常に必要のため、ほとんどのタイの留学生は、日本語をそれほど必要としない学府に所属している）。なぜこれほどまで、九州大学を始め、日本の大学には留学生が多いのか？ 日本の大学の魅力は何なのか？ タイの大学と比較しながら検討していきたい。

タイの教育

タイにおける教育制度は、おおよそ日本と同じく、

小学校6年間、中学校3年間そして高等学校3年間である。義務教育は小学校卒業までであるが、最近、中学校卒業までに延長させようという動きが出てきた。またタイも学歴の社会であるため、より安定的な職業に就きたい人は大学へ進学する。

タイの大学に関する考え方は第2次世界大戦まではフランス・イギリスの影響、そして、その後はアメリカの影響を強く受けてきた。タイは第2次世界大戦後まで東南アジア唯一の独立国であったため、外国の制度をそのまま受け入れることなく、外国の教育概念を国教である上座仏教とうまく統合させ、発展させてきた。また、その後工業化が急激に進んだ1980年代においても、自国の伝統的な考え方に害を与えることなく、様々な国の教育概念を巧みに導入してきた。このことがタイの大学の特徴であるともいえる。

大学の管理運営の形式は、日本と同様、大学評議会を統括機関とし、この機関は政府の承認を得るということを経営に重要な決定を行う。評議会は、政治家や学者（後者の場合が多い）を総長に、学長、学部長、学科長や、他の大学の研究機関の長から構成されている。学長は主たる管理者であり、教育・研究に関する事項は学部長を通じ、その他管理事項に関しては事務局長を通じて監督をしている。運営システムについては日本のそれと大した違いはない。

国立大学の1学年暦はアメリカの2学期制を導入し、前期と後期に分かれている。それは

前期 5月末（6月初め）～10月初め

雨季休み 2～3週間

後期 10月末～3月末

夏休み 4月～5月（この間、4月半ば～5月半ばは夏学期であり、その扱いは1学期と相当である。）

以上がタイの国立大学の概要である。

ここで注目したいのは、タイの場合、初等教育にせよ高等教育にせよ、全ての教育において仏教をカリキュラムの中に取り入れているということである。タイ人は皆仏教徒であるというわけでもないが（9割以上

世界・日本

のタイ人が仏教徒である), 国教が上座仏教であるためか, 小・中学校や高等学校では, 必修として倫理の授業がある。授業が始まる前に朝礼があり, そのとき, 国旗を揚げるとともに国歌を歌い, そして, それが終わったあと簡約のお経をあげるというようなことを毎日行うのである。大学では, 朝礼は行われぬが, それでも卒業式など大事な式典ではやはり僧侶が重要な役割を演じている。

このように, タイの教育と仏教とは親密な関係があり, 仏教なしでは教育が成り立たないといえるほどである。

これほどまで仏教を教育に取り入れれば, 国民の誰もが自動的に仏教徒になるのではないか? ある意味では強制的だが, このように教育と仏教を統合させているからこそ, タイ特有の教育現場が存在しているのだと思う。しかし, 誤解のないように記しておくが, タイにある全ての学校や大学は, 授業や講義を通じて, 仏教の観念を学生たちに無理やり押し付けているわけではない。あくまでも国民には宗教を自由に選択する権利があり, 仏教徒ではないからといって, 入校を拒否されることはない。

日本の教育

日本の教育制度とタイの教育制度は, 上述の通りきわめて類似している。しかし, 日本の初等教育においては, 宗教活動がなく, 学校と宗教との繋がりやタイと比べて薄いのである。

日本の大学の設立目的は, 19世紀半ばに国家の成長を支えるために, 西洋の考え方を輸入することであった。日本は教育体系のみならず, 政治経済の面においても独自の成長を成し遂げてきた。その理由は, 日本の大学の発展過程には2つの側面があり, 1つは, 西洋モデルを検討し, その内いくつかを部分的に取り入れる時期と, もう1つは, 特定の西洋モデル(アメリカ)を全面的に取り入れる時期があったからである。アメリカの影響が大きく, 日本の大学システムはタイの大学システムに似ている。

しかし, 異なるのは教育設備である。日本の大学, 特に理系では, コンピュータや実験道具などの教育設備が揃っており, 学生のニーズに応えるための十分な力を持っている。その理由は日本の経済力にある。

1950年代以降, 資源不足を軽減するために, 日本は

輸出を中心に経済成長を成し遂げてきた。そして, 1960年代の高度成長期を経て先進国の仲間入りを果たした。外国, 特に新興国にとって, 日本の事例がとても興味深いのである。このことが留学生を魅了する直接的な原因ではないかと思う。

日本に留学したい理由の1つとして, 教育設備や環境が揃っていることが挙げられる。そしてもう1つは, 高度経済成長を成し遂げた日本人の考え方・国民性が外国人の高い関心を引き寄せていることである。途上国であった日本が先進国のアメリカを見習ったように, 現在の途上国も先進国の日本を手本にしようと考えているのだ。また, 学問上や貿易取引上, 日本と関わりのある様々な分野において, 日本語が非常に必要になってきたため, 日本語を身につけておきたいと考える人が増えたことも考えられる。

タイや他のアジア諸国からの留学生が九州大学にたくさん来ているのも, 以上の理由がある。私もその中の1人であるが, 実際に日本の大学で勉強して感じたことは, 日本人大学生の中に一所懸命勉強する学生と, そうではない学生との間に差があることである。大学学部での勉強は高等学校と違って, 真剣に取り組まなくても卒業できるだろうと軽視されている。それはおそらく, 大学受験が終わった学生は安心感であふれていて, 大学に入ってから勉強に対する意欲が湧かなくなってしまったのではないかと思う。しかし, 大学4年生になると就職活動が始まり, それまでのんびりと過ごしていた学生たちが急に一所懸命になるのである。タイの大学4年生も就職活動で忙しいが, 大学の4年間, 勉強はもちろん部活活動や合宿などもあり, 充実した大学生活を送っているようである。

両国は同じようにアメリカの影響を受けた。しかしアメリカの教育概念をどのように採用し展開したかについては, 大きな相違がみられる。タイの大学は自国の文化や国教を維持しながら, 展開することが特徴であるのに対し, 日本の大学は経済成長を支えるために, 外国の概念をそのまま導入したのが特徴である。どちらのやり方が良いか言い難い。日本の大学は少なくとも新興国にとっては, とても魅力的だということは疑いのないことであろう。



学部ゼミと六本松での勉強

経済学部4年 ^{にし} ^だ ^{まき} ^こ
西 田 真季子

アルバイト、サークル、コンパ。どこの大学の学生であっても、今、日本の大学生にとってはこの3つに追われ、その合間にテストを乗り切って、あとは就職活動——それが大学生生活なのかもしれない。私自身、大学に入るまでは色々と考えていても、いま大学4年生になって振り返ってみると、そうした「標準的な大学生生活」を送ってきたなと実感する。それでも、多くの学生にとって大学生活の中でゼミは特に印象に残るものだと思う。私もそうだ。ゼミを始めるまでとそのあとでは勉強というもののとらえ方が全く変わった気がする。そこで、私のわずかな経験からではあるが、「ゼミ」について、またゼミを通して感じた六本松と箱崎の違いなどについて書いてみようと思う。

ゼミ（「演習」という授業科目になっていることが多い）は主に箱崎で行われる。六本松でも「少人数ゼミナール（3年前のことなので名称は変わっているかもしれない）」とあって箱崎でのゼミと同じような形式での授業があるが、それは自分の所属する学部と無関係のものでも学べるし、やはり学部の専門内容と直結した箱崎のゼミの方が内容が濃い気がする。私自身、箱崎に来て初めてゼミをとった。経済学部では2年次に半期完結のミニゼミのような科目があり、そこでゼミというものを初めて知った。たいていの1年生は、ゼミといっても名前を聞いたことがある程度で実際にどんなものか分からない。ミニゼミを受けることで、本格的にゼミを始める前にまずはゼミの雰囲気に慣れることができるので、心の準備ができるのだ。そして、3年次に本格的に1年単位のゼミに所属し自分の勉強をして4年次に卒業論文を書く（学部によっては必修ではない）。

具体的にはゼミとはどんなものなのだろう。一言でいえば自己責任の勉強といったところであろう。箱崎での専門科目の授業ですら、必修があったりテストがあったりで、高校までの、そして六本松での授業の延長のような部分があった。決められた課題をこなす、といったような面が強く感じられた。しかしゼミは、ゼミをとるかとらないかから、どのゼミを選ぶかとい

うこと——これが3・4年次の大学生生活にとって重要な意味を持つのだが——、それも自己決定だ。しかし、一番大きいのは、ゼミを選んだあとも授業のように決まったコースがあるわけではないということだ。各ゼミにより異なるだろうが、ゼミの一般的な形式はゼミ全体で1冊の本を決め、交代でゼミ生が本の決まった部分をまとめ、レジュメを作りそれに基づいて発表をするという輪読形式のものである。その後は、それをもとに質問をしたり議論をしたり先生が意見を述べたりするという形式が多い。だが、その形式も決まったものではないし、最低限のいわば宿題みたいなもので、それから「何を」「どう」勉強するかはその人次第なのである。

この点がゼミの一番大きな特徴であり、魅力でもある。冒頭に大学生活は遊びが多いというようなことを書いたが、大学に入学する以上みんな何か勉強したいことがあるはずだ。そうでなくても、入学して勉強をすすめるうちに興味のあることが必ず出てくる。その好きなことを自分で好きなように、しかも教官や先輩というパートナーに手伝ってもらいながら、できるというのはとても恵まれたことだと思う。私がゼミに魅力を感じる最大の点はそこだ。大学での勉強自体、それが魅力的なはずだが基本的知識の乏しい私にとっては、どうしてもゼミ以外の講義は高校までの延長の様な感じがしていたのだ。

私の所属するゼミの話は少ししよう。私は少し変則的で2つのゼミに所属している。所属する経営学科のゼミ（国際ビジネス演習、加来祥男教授）と経済工学科のゼミ（経済工学演習、藤田敏之助教授）だ。どちらでも、先程書いたような輪読形式をとっている。レジュメを作り、発表をするというものだ。経営学科の方では、コーポレートガバナンスやフォーディズムなど様々の本を、経済工学科の方では環境経済学の本を取り上げている。私は今でもそう熱心な方とは言えないが、3年次にくらべると少なくとも気持ちの上では熱心になり、卒業論文のためのテーマ探しをしながら輪読を進めているのが現状だ。

では、ゼミ形式をほとんどとらない六本松での授業と言うのは何の意味も持たないのだろうか？ 少なくとも私はそうは思わない。六本松と箱崎というのは全く性質の違う勉強（学生にとって）を分担していると、箱崎に移ってきてから実感した。六本松での勉強は最初は高校生のようなのだと思った。講義も部分的にしかおもしろいと感じていなかった。しかし、箱崎、特にゼミでの勉強をするようになって、六本松の講義も基礎として意味を持っていたのだと実感した。経済工学科のゼミのように数学など、直接的に役にたつこともあるが、それだけではない。知識以外のこれから専門分野を学習する上での教養のようなものが六本松の勉強だと思う。例えば、卒論を書いたりする時など実に多くの文献や知識に触れなければならないのだが、全てを1人で本を読むというのでは難しい。そんな時に、断片的であってもその分野に触れていたりすると（本をじっくり読んだ時ほど深いものが出せなくても）、自分の中に教養として身につけているためスムーズにその分野に入っていける。本を読むにしても、そういう「下地」があると本当の専門分野がとて理解しやすいのだ。そういう意味では六本松での勉強と箱崎で

の勉強は完全に役割分担されていて補完しあっているもので、それぞれに欠くことのできないものだと思う。

最後に、ゼミのもう1つのよい点としてゼミ内部での交流があると思う。ゼミの先生やゼミ生同士の間では、勉強だけでなく、とても深い濃い付き合いができる。週1回でも1年間、顔を合わす仲間というのは親しくなれるものなのだろう。もちろん、そこには少々のお酒が手助けをするのだが……。私の場合、4年になり就職活動をする中で特にそういう付き合いができるようになったと思う。

決して勉強熱心とは言えない私がこのような原稿を書くことには、ためらいというか申し訳なさがあるのだが、ここで書いてきたことが、これからゼミを選ぶとし、箱崎での生活を迎えようとする後輩のみなさんに少しでも役に立てばうれしい。私が先生によく言われるのが「ゼミは君たちのものだから」という言葉だ。ゼミは自分、そして同じ専攻分野に集まったその「自分」の集まりであるゼミ生自身のものだ。それぞれが主体的にゼミに参加したらとても楽しいものになると思う。

(8頁より)

ものはない。しかし、本当はその目に見えないものこそが最も大切なものである。そう自分に言い聞かせるようにして努力してきた。私の大学4年間は悩みとの戦いであった。しかし悩んだ末にたどり着くのは悩んでいる自分の存在だけであった。それだけは確実なものであった。そして、その悩みをのり越えるたびに自

分が確実に成長しているのがわかるのである。

先の見えない時代、個人の力は大きなエネルギーをもつ。1人ひとりの人間が悩みと向き合い、謙虚さを忘れず一生懸命努力すれば、社会全体のエネルギーは絶大なものとなるであろう。先の見えない時代とは裏を返せば個人々々の持つ力がためされる時代である。そして2002年7月、私はまた悩んでいる。

「何でも相談窓口」の案内

全学教育事務室

九州大学六本松地区キャンパスには、多い時期は4,500名程の学生が在籍しています。大学生活を送っていく中で、修学上の問題や学生生活についての問題等が生じることがあるかと思えます。こういった問題を解決するための全学的な相談窓口として「学生生活・修学相談室」が設けられており、常任相談員(カウンセラー教官)及び相談員が学生の相談にあたっています。

常任相談員は、各種相談の他に、各学部や学府の修学上での専門的内容の相談について、必要に応じて各学部や学府の相談員(教官)を紹介します。

今年の4月からは事務職員が担当する「何でも相談窓口」を設置しました。この窓口は学生からの相談をより早期に解決をするため「学生生活・修学相談室」等と連携を図り、また学内・学外の関係機関への紹介を行う窓口です。皆さんが「……の場合、何処に相談をしたらよいのかな?」と思った場合は、いつでも気軽に「何でも相談窓口」:(六本松地区キャンパス本館1階☎092-726-4582:学務課専門員)に御相談下さい。



大学で勉強すること

人間環境学府修士1年 ^し志 ^わ波 ^{ふみ}文 ^{ひこ}彦

1998年4月、私の大学生活は数々の悩みとともに始まった。大学入試の前期日程で不合格となり、後期試験の英語と製図のみで辛うじてこの大学に合格した私にとって、勉強というものの存在は常に頭から離れない大きなテーマであった。私は高校時代においても、そこで教えられる勉強というものに疑問と不満を感じ、常に「本当の勉強とは何か」ということを考えてきたように思える。そして本当に自分のしたいこと、自分でできることを模索してきた私にとって、大学生活はその1つの結果を出す大きな機会であった。

このような背景をもって大学生活を始めた自分には、周囲の皆が習得している一定の「学力」と言われるものに対するコンプレックスと、それを越えた部分でこれまで本当にやりたいことを模索し続けてきた自分に対する奇妙な自負とが同居していた。大学ではこれまでの学力や評価は一度リセットされる。そのかわりに自由を手に入れるわけであるが、新しい世界に立ったとき、これまで縛られていると感じていた「学力」というものさしに、知らぬ間に依存していた自分がいたことに気が付いた。それは人から与えられ、準備されたことをこなしてさえいれば安定した場所が与えられるという世界であった。しかし、そのものさしが取り払われたと気付いたとき、そこには自分しか残っていなかった。これから先は自分という存在そのものの勝負の世界である。自分のやることは自分で判断し、その責任は自分で取る。私はその判断には、まず自分自身の「人間としての深さ」が前提となると感じた。そして「人間としての深さ」という目で自分を見たとき、自分自身の無知を何よりも恐ろしく感じたのである。自分にはもっと知りたいことがあり、もっと知らなければならないことがある。そして大学という場にはそれができるだけの十分な場があると前以上に強く感じるようになった。周囲の友人たちはいかに少ない授業数で単位を取得し卒業するかに腐心する。しかし私はそうはしなかった。あらゆるものへの興味・関心を忘れてはならないという思いが様々な方面の授業をできるだけ多く受けるよう、いろいろなものを注意深

く見て、考えるように私を駆り立てた。私は文学、文化人類学、考古学、経済学、法学、生物学、農学、天文学など広範な分野の授業を取った。確かに低年次教養科目はその学問領域の初歩の部分でしかない。しかし、これらの授業は、私にとって様々な学問の分野の知識を「教えられる」ことを越えて、自分自身が知らず知らずのうちに見過ごしてきた様々なことを教えてくれた上に、「どのようにして物事を考えるか」という、勉強することに対する意欲と動機づけを与えてくれたように思う。もちろん授業だけに限らず、今まで存在すら知らなかった数々の本を図書館で手にとって読めるということなども、すべて新鮮で純粋に楽しかった。これが勉強することなのだということを実感した瞬間でもあった。これは私の専攻が広範な知識を要求される建築学だったからこそできたことかもしれない。私たちがこれまで習得してきた様々な断片化された知識は、それぞれバランスよく統合されて初めて人間を形成するに足る知識となるのだと思う。そのためには現在役に立たないから、関係ないからといって、いろいろなものを切り捨てていくことは、自らパズルのピースを1つ、また1つと捨てていくようなものである。私は、今の自分の価値基準がすべてではないという謙虚な姿勢を常に大切にしたいと思っている。

このように、私は大学生活のなかで自由な勉強ができる機会を与えられた。一方でその中でも、これから何を自分の軸としていくのかといった将来への漠然とした不安も、自分の中で大きな部分を占めていた。しかし、私はその漠然とした不安から逃げ出すことだけは絶対にしたくはなかった。この不安と戦うには目の前にある小さな問題から解決していくしかない。そしてこの深い思慮と努力の継続こそが自分をさらに成長させるのだと思う。この小さな積み重ねは想像以上に困難である。周りで様々な友人が何か目に見える形で行動を起こすたびに不安と焦燥に駆られる自分がいた。はっきりと目に見えないものを信じることほど不安な

(7頁へ続く)



高大合同のゼミナールを通して

法学部2年 ^{ふじ}藤 ^{さわ}澤 ^{よし}義 ^{たか}貴

1. はじめに

高大接続がいま盛んに叫ばれています。高校生が大学に入学した時に感じるギャップはどこから生まれるのでしょうか。高校生と大学生との間に何か学びの上で違いがあるとしたら、それを上手く高校生に伝えてあげることで、大学への適合度が増すのではないか…このような素朴な疑問から、高校・大学の合同ゼミナールが生まれました。

約2万人を対象とした全国的な統計調査では、大学で必要かつ高校時代に身につけることができている能力として

- ① プレゼンテーションをする能力
- ② まとまりのある長い文章を書く能力
- ③ 自分の考えを分かりやすく説明する能力
- ④ 自分の意見を筋道を立てて主張できる能力

の4項目が顕著な値を示していました。この4項目に目をつけ、ゼミナールという学びの手法を使って大学の知の営みを高校生に伝えようと思ったのです。

2. 高大合同のゼミナール

高大合同のゼミナールは、「教育」をテーマに5学部1プログラムの学生が参加して、12月の第2土曜の第4土曜の2日に分けて行われました。

まず、1日目は普段の私達がどのようなゼミナールを行っているのかを知ってもらうため、高校生にオブザーバーとして参加してもらい、大学生のプレゼンテーションや討論を見てもらいました。高校生にとっては、大学生の学びのスタイルを垣間見る初めての機会ということもあって、多少圧倒されていたようです。

そして、2日目は高校生各人にプレゼンテーションをしてもらうはずでしたが、何と当日に高校生が現れない(ドタキャン)というアクシデントが発生してしまったのです。それでも、かろうじて参加してくれた高校生が1名いて、何が問題であったかを一緒に話し合いました。その結果、私達が各人のプレゼンテーションにこだわり過ぎてしまったことと、高校生が、私達が考えている以上に自分の考えを表現することにな

れていなかったために、かなりのプレッシャーを与えてしまったことが主な原因だったようです。高校生1人につき2人の大学生をつけてアドバイスを試みたのですが、今回は初めての試みであることもあって、上手くいかなかったところもあるのかなと反省しています。

しかし、その一方でプラスの効果もあったようで、1ヶ月後に行われた追跡調査によれば、高校生活における意識が変わったことがうかがえました。それによると、

- ① ただ黒板を写すだけの受け身の授業では役に立たないと実感した。
- ② 自分の考えを表現することの難しさを痛感したことで、今後機会があれば練習したいと思うようになった。
- ③ 講義中心だったと思っていた大学の学問のイメージが、自分で主体的に研究していくことが重視されるイメージに変わった。

そして、何よりもうれしいことに、

- ④ 高校生が今回のゼミナールを経験したことで、是非とも大学に進学して勉強をしたくなったと答えてくれたのです。

今回の高大合同のゼミナールは、高校生によるプレゼンテーションの試み自体は達成できませんでしたが、高校生が、ただ漠然と大学のイメージを捉える姿勢から、明確な意識を持って大学生活に臨もうとする姿勢に変わったという点で、成功を取めたといえることができるでしょう。

3. おわりに

これまでの大学情報は、学部の特徴を伝える側面が強く、公開授業は学部単位で行われるのが基本でした。しかし、こういった専門分野に特化した大学紹介は、高校生に対して大学は専門分野だけを学ぶところだという誤解を与え、ひいては教養教育における学生のつまずきにもつながっていると思うのです。大学紹介を柔軟な学生の「なま」の感性で運営していくことには、それなりの意義があると思います。

女だらけの おしゃべり大会 -女子学生グループ-

「女子学生グループ」って？

女子学生グループが始まって、今年で3年目に入りました。現在のグループについて紹介します。

- 1) グループの目的 グループでは普段知り合う機会のない仲間と出会います。そこで自分の話を聞いてもらったり、また人の話を聞くという体験を通じて、みんな同じように悩んでいることを知って気が楽になったり、また学生生活のなかで抱える疑問や問題の解決法を学んだり考えたりする機会になるのではないかと思います。昨年は1年生とスタッフでバイトやテスト対策などそのときに困っていることなどについて話していました。また、今回は1年生と2年生の女子学生の参加によって、2年生は1年生に学生生活についてのアドバイスをしたり、1年生の話す内容の新鮮さに2年生が聞き入ったりと学年を越えた交流が行われていました。
- 2) メンバー 前・後期に張り紙とカウンセラーの先生の授業を通じてメンバーを募集しています。今期、女子学生は1年生2名、2年生5名で集まっています。院生の企画スタッフもメンバーとして毎回参加しています。スタッフは大学院人間環境学府人間共生システム専攻心理臨床学コースの院生5名です。
- 3) 期間・時間 今期（5月から7月まで）は週1回、90分程度でした。10月以降の予定はまた掲示板等でお知らせします。
- 4) 場所 六本松地区本館1階にある学生生活・修学相談室のグループ面接室です。（吉田加代子）

スタッフから見た女子学生のグループ

私は女子学生のグループでスタッフとして参加しています。ちょっとしたお茶の準備や司会進行をすることが役目なのですが、それ以外は学部生のみんなと話したいことを話して一緒になって充実した時間を過ごしています。スタッフの平均年齢はメンバーよりも5、6歳ほど上なので、助言のようなこと



をするときもあります。ですが、基本的には、慣れないことも多い大学生生活の中で学部生のみんがが試行錯誤していることについて、一緒になって考えていきたいな、と思っています。今は今で数年前とは変わったところも多いですし、その人それぞれが置かれている状況や抱えているものも違いますから。それに、どんなことをするにしてもその人なりの価値観や考え方が重要で、そこでは先輩も後輩もありません。人それぞれ異なる経験なり考えなりはどれも同じ重さで大変貴重なものである、ということを実感しています。みんなでお茶をする中で、お互いに良い刺激をもらったり、励まされたり、安心したり、自分を振り返ってみたりといろいろですが、この女子学生のグループがスタッフの私にとっても、心地よい場所となっているのは確かなようです。（松下 智子）

楽しい時間を

私は1年の前期からずっとこの「グループワーク」に参加させてもらっていました。「グループワーク」を知ったのは受講していた講義がきっかけで、まだ大学に慣れていなかった私は院生の話を聞いてみたいと思ったのです。

とは言っても、初めの頃は緊張していて、どういうことを尋ねればよいのか分からずにとまどっていました。しかし、どんなにささいな疑問についても、また大学生活に余り関わりのないようなことにも、院生の方々は真面目に考えて下さったり、それぞれの経験に基づいてアドバイスをしてくれました。そういった態度は私にとって話しやすい雰囲気を作り出すことに

なり、もっといろいろなことについても、尋ねてみたいと思ったりしました。また、それぞれの方が話をして下さったので、多様な意見を頂くことができたのも良かったと思います。多少話はずれますが、みんなでお菓子を買って食べるのも、アットホームな感じがして私は好きでした。

今までの3期にわたって私は「グループワーク」で良い時間を過ごせました。少しでも「グループワーク」に興味をもった方は、ぜひこれから参加して欲しいと思います。
(経済学部2年 M・H)

大学生生活をより充実したものとするために

「大学生」は今までの大学生活とは異なり、人間関係が希薄になりやすい。そのため個々人が積極的に他人との関わりを持たなければ、なかなか充実した人間関係を築いていけない。大学で与えられる多くの「自由」をどれだけ自分の人間的成長の糧にするかは、我々次第である。

そんな私の「自由」を満たす人間関係の中の一つである「グループワーク」。私はもっと多くの人にこのような語らいの場があることを知ってほしい。

クラスでは同学部や同学年、部活やサークルでは同じ趣味、バイトでは社会経験や金銭獲得などと、我々が関わる社会集団にはそれぞれの特徴や目的が存在する。もちろんこのグループワークにも「女性のみ」という特徴がある。ここでは女性ならではのテーマについて会話をすすめたり、毎週おやつを楽しみにしたりなど、一見たいしたこともない普通の光景を目にする。しかし、大学院生もいらっしゃるせいか、また違った意見や感想を得られることもしばしばである。

まだ大学生になってもいまいち充足できない人は、「受け身」の姿勢から「攻め」の姿勢へとチェンジして、より多くの他人と関わりを持つことによって新たな自己発見をしてみてもはどうだろうか。

(経済学部2年 M・E)

私にとって「グループワーク」とは

大学に入学して間もない頃、慣れない環境の中で何とかこの生活に溶け込むため、いろんな活動に参加しようと苦心していた時に、このグループワークのチラシを見つけたのです。正直言うと、最初このチラシを見たとき参加しようか迷いました。なぜならばこの活動の中心となっているのが、大学院生だというのが気になったのです。院生といえば、私よりもはるかに大

人で、そのような方々の中に入っていけるか心配だったのです。しかしざドアを開けてみると、先輩はとても親切に迎え入れてくれました。それに学部の2年生や同じ1年生も参加しているということもあって、想像していたよりも早くこの中に溶け込むことができました。また、話の中には1週間のうちにあったささいなことから、まもなく私にも関わってくる年金などの話まで様々なものがありました。やはり先輩の話は、まだまだ様々な面において未熟であった私には、とてもありがたいものばかりでした。しかし何より私が一番楽しみにしていたことは、自分の話を聞いてもらうことでした。その1週間に起こったどんなことでも、皆さんは真剣に聞いてくれたり、うなずいてくれることがとてもうれしかったのです。それだけで1週間のストレスも発散された上、この活動が私にとって1週間のしめくくりになっていたのです。このような貴重な場を得ることができ、私は本当にこの活動に参加してよかったと改めて感じました。

(文学部1年 K・S)

女の子だけの、おしゃべりティータイム

1年生の始めの頃、分からないことばかりでいた時に偶然、このグループワークの貼り紙を見つけました。まだまだ友人達とも親しくはななくて、寂しかったので、人の輪を求めて参加した。そんな感じでした。

1年の頃は、私達1年生と院生の先輩。先輩はいつも真剣に話を聴いて、いろいろなアドバイスをしてくれました。本当に優しく楽しい方達です。それから今年の4月に、新しく1年生と新メンバーが加わりました。様々な人と仲良くなれるというのは、ココに参加する特典だと思います。院生の方達や学部学年が違う人達と話す機会はあまりないと思います。

たくさん話をしました。バイト、テスト、部屋探しの話。恋の話で盛り上がるのは、女の子だけの集まりだからでしょうか。自分の1週間の出来事についても聞いてもらいます。それぞれの1週間にいろいろなことがあります。嫌なことは聞いてもらえるとスッキリするし、良いことは一緒に喜んでもらいました。流れる時と共に内容も変化していきます。1週間前に誰かが話したことが、1週間後には進展していたり。自分の成長みたいなものを感じたり。

週1。お茶とお菓子を囲んで、皆でおしゃべり。

私の大好きな時間です。
(M・Y)



永井

池松

「雄飛」の名のもとに ～田島寮生，博多の街を翔る～

6月29日（土）、小雨がパラつく中、今年も田島寮々祭樽神輿が行われました。天神の須崎公園を出発し、警固四つ角、九大六本松キャンパス、田島寮というルート^{みこし}を3時間ほどかけて練り歩く我々に、沿道からも多くの声援、勢い水が飛び交いました。

今年の寮祭は“雄飛”というテーマのもと、5月25日の駅伝大会に始まりました。それから6月28日までの約1ヶ月、1年生は競い合い、助け合い、その中で寮生としての絆を深めます。1ヶ月間にわたり繰り広げられた熱戦を闘い耐え抜いた証として、また友情や感動など自身が得た様々なものの集大成として、樽神輿が存在します。

この寮祭の樽神輿は、今年で46回を迎えることになりました。大学教育研究センターの押川教授も第2回寮祭に参加されたそうで、当時はふんどしではなく使い古したパンツをアルマイトの洗面器の中で赤く染めたものを着用していたということでした。この46年の間で、寮祭の内容は大きく様変わりしました。しかし、寮祭への情熱や意義は変わることはありません。田島寮がある限り寮祭も続いてほしい。全ての仕事をやり遂げた今、未来の寮生へと託します。

(法学部2年 永井 英晴)



初めてふれた世界

九州大学に入って3ヶ月が過ぎた。同時に九州大学田島寮に入って3ヶ月が過ぎたことになる。想像を絶する3ヶ月であった。特に寮祭は圧巻だった。大学生にもなって本気で走ったり喜んだり怒ったり悔し泣きをすることは思わなかった。でもそれは実にいいものであった。こんなことをさせてくれた人々に感謝したい。僕達をバカだと言う人がいるかもしれない。確かに僕達はバカである。しかしバカになって初めて見える世界があるのだ。人間一度はその世界を見た方がよい。僕は寮祭を通じてそう思った。

(工学部1年 池松 幸司)



“樽”神輿

祭りである。祭りといえば神輿である。というわけで、僕ら田島寮1年生は寮祭で神輿を担いだ。ただの神輿ではない。“樽”神輿である。寮祭があるごとにつくられ、ついに今年第46代目となった、由緒あるものだ。僕らはこれを担いで、ふんどしで、ワッショイワッショイ叫びながら天神の道路を堂々と歩いた。恥ずかしいとか馬鹿々々しいとは微塵も思わなかった。それどころか誇らしさで一杯だった。1ヶ月間真剣に祭をやってきたからこそその気持ちだ。たぶん一生に1度の、それも最高に密度の濃い思い出だ。

(文学部1年 水之浦 聡)



実行委員長の大役を終えて

6月29日午後2時。この瞬間に至るまでとても長い、しかし思えば短かった様々なことがありました。田島寮では寮全体の行事として4月に行なわれる新入寮生歓迎行事と6月に行なわれる寮祭の2つがあります。僕はその2つの行事を新入寮生歓迎行事では寮長として、寮祭では寮祭実行委員長として支える側にまわってきましたが、この2つの行事は2つが一連となって1つの田島らしさを生む大切な行事になると考えています。

まず新入寮生は、4月1、2、3日の新入生歓迎行事に参加するようになっていくわけですが、これは6月29日の田島寮祭樽神輿に至るまでの起点なのです。その他にもパンツ行進といわれる、パンツ一枚で寮から学校まで行進する行事など、傍からみると“バカ”に見えることをやってきました。そして6月になり、各棟A、B、Cと分かれて互いにソフトボール、サッカー、他にもビーチフラッグやフォトグランプリなど様々な競技をこなします。これが29日に樽神輿を担ぐ時の各自が身につけるfundoshiの色の決定につながるのです。A、B、C棟が1位が身につける赤色のfundoshiを目指し競うわけです。

新入寮生歓迎行事も寮祭も主役は1年生です。僕達2年生は、去年僕達が1年生の時に味わった感動を味わってほしいために、精一杯実行委員として行事を支えてきました。1年生が必死になり、互いに競い合う。何かこの田島寮に入寮したからには目には見えない漠然とした“何か”を得てほしいと僕達は願っており、その自分をむき出しにして必死で競技に参加する姿には、僕達実行委員の胸を熱くするものがありました。

28日までの全ての競技が終了した後、fundoshiの色が各棟に発表されます。1位が赤色、2位が青色、3位が黄色となり、28日まで競い合った寮生同志が29日の樽神輿の時は1つになり“バカ”になって精一杯樽神輿を担ぎます。1年生が樽神輿を担ぎ、2年生の実行委員ははかま姿で樽神輿の上に乗ります。僕も実行委員長として乗りましたが、あれほど気持ちいい最高の瞬間は他にはありません。田島寮が1つとなり天神や国体道路をずいずいと行進していくのです。行進中には、道路沿いの店の方々に協力してもらい勢い水をfundoshiをしめた1年生にかけます。その姿は、恥ずかしいものでも何でもなく、力強くりりしいものだと本当に心から思いました。そして六本松キャンパスへ寄り、挨拶をすませた後、いつもお世話になっている別府商店街を経て田島寮へと帰ります。

樽神輿局々長から1年生へのメッセージが終わり僕も1年生へと気持ちを伝えました。その時に涙が勝手に溢れ出したことを今でもはっきり覚えています。この涙を流せたのは、がむしゃらになり精一杯やってくれた1年生と僕を支えてくれた実行委員達のおかげであることは言うまでもありません。彼らは僕に感動を与えてくれました。この感動は一生のうちにそう幾度も得られないものだと思います。この感動を与えてくれたみんなに言葉だけではいい表わせない感謝の気持ちをおくりたいです。みんな感動をありがとう。この田島寮は“バカ”です。でも“サイコー”です。田島寮に入れ、色々な行事を経験でき、この思い出はかけがえのない宝物になると確信しています。

最後に、僕達が様々な行事を行ってきた中で、あたたかい御支援をして下さった寮務さん、九大課外掛の方々、九大職員の方々ならびに地域のみなさま、警察の方々にこの場をかりて、田島寮を代表し心から感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

(経済学部2年 西 勝史)

サークル紹介



『♪ 一声入魂 ♪』

法学部3年 ^{やま} ^{した} ^{さと} ^こ
山下智子

こんにちは。私は九大混声合唱団の2002年度代表の山下智子です。今回は僭越ながら、我が九大混声合唱団（以下九混）の紹介をさせていただきます。九混は、九州大学及び九州大学医療技術短期大学の学生で構成され、女性17名、男性22名で活動しています。九混の歴史を紐解いてみると、今から39年前の1963年に歌の大好きな九大生が集まり、音楽を楽しみつつ、自分たちで演奏会を開催できる合唱団になることを目標に結成されました。結成当初からの団員の歌に対する熱い想いは確実に今もなお受け継がれ、日々の練習では情熱をぶつけ合っているといっても過言ではないくらいの気合の入れっぶりです。ここで、我が団がどのような練習を行っているのか気になった方のために、九混の練習の風景を紹介させていただきます。

基本的には週3回（1回あたりの練習時間は約2時間半）練習を行っています。合唱団って歌っているだけだから楽そうと思われがちですが、我が団では歌う前にストレッチと筋トレをおこなっています。実はここだけの話、かなりきつかったりします。このことから、団員の間では九混のことを「体育系文化サークル」と呼ぶものもあります。しかしながら、団員は好きな歌を歌うためならばと、筋トレに耐えています。そしてその後には、水を得た魚のように、あるいはダムでせき止められていた水が放たれるがごとく、歌いだします。ホント時がたつのが早いと実感させられるほど、夢中で歌っています。いやハモってます。音と

音との重なり、そしてぶつかり合いがなんともいえぬ快感を作り出しています。まさに九混の練習場は、音楽のアミューズメントパーク、いやハーモニーの祭典です。

また、我が団は、前述のような情熱あふれる日常の練習の成果を試すため、夏から秋にかけて日本合唱協会主催の合唱コンクールに出場したり、年末には単独で企画・運営を行い、定期演奏会を開催したりしています。

合唱コンクールにおいて昨年度は、九州大会にて惜しくも金賞を逃し、僅差で銀賞を受賞しました。今年度は、リベンジの決意を胸に抱き、九州大会金賞受賞あわよくば全国大会出場を目標としています。

今年度は12月22日（日）に福岡市早良区ももちパレスにて九大混声合唱団第39回定期演奏会を開催することとなりました。定期演奏会では、今というこの世の中を生きていく私たちの気持ちを大好きな歌に託し、4ステージ構成で演奏します。夏の太陽に負けないくらいの熱い私たちの想いと、太陽の日差しを浴びて輝く向日葵のような私たちの笑顔、そして青い海のように広がる爽やかなハーモニーを聴きに、感じに、癒されに、我が団の定期演奏会に足をお運びいただくと幸いです。簡単ですが九大混声合唱団の紹介とさせていただきます。

九大混声合唱団公式ホームページ

<http://rcweb.rc.kyushu-u.ac.jp/~kyukon/>





九州大学テコンドー部紹介

工学部1年 あらかたやすひろ
荒田 康 弘

テコンドーについてははっきりと語れる人はおそらくあまり多くないでしょう。僕自身もテコンドーについて「格闘技の一種」程度しか知りませんでした。現在テコンドーはオリンピック種目として注目されつつあります。ここでは僕が目から見たテコンドーを紹介したいと思います。

ショック

まずテコンドーをやって一番最初に驚いたのがその掛け声でした。いきなり「チュンビ!」と言われても「え?」って感じですね。なんとテコンドーの掛け声は韓国語でやります。参加初日は本当にびっくりしました。その後「準備」のことですと一言なければきっと今頃は別のサークルに入ってたでしょう。

意外??

これはいい意味で、先輩がとても親切だったということです。「受け」や「蹴り」でわからないところがあると、そのたびにいろいろな先輩が声をかけに来て、丁寧に教えてくれます。ここまで親切に教えてもらえるとは思ってなかっただけにとても意外でした。

練習場所

水曜日は午後6時から六本松の体育館、土曜日は午後7時から貝塚の体育館であります。週2できつい人は別に週1でもかまわないみたいです。やる気のある人は月曜日と木曜日に六本松方面にある原道場に通うこともできます。

練習内容(前期)

まずランニングして準備体操とストレッチをし、その後掛け声に合わせて「突き」、「受け」、「蹴り」の練習をしました。次にミット蹴りです。これはボクシングのミット打ちと同じ要領で、構えているミットを蹴ります。これが結構面白くて、いい音がした時はとても感動します。さて、あとはその日によって違いましたが、スパーリングとか「型」の練習が多かったです。スパーリングは防具をつけてやるので思い切りできます。「型」は「突き」「受け」「蹴り」を組み合わせたもので昇級するために必要になります。

練習風景

「テコンドー」＝「格闘技」という連想からものしい練習風景をイメージしていたのですが、すぐに考えを改めました。もちろん練習している時はまじめにやっていますが、特に緊迫しすぎることもなく、練習と休憩のメリハリがしっかりしていて練習の1つひとつを楽しめる雰囲気があります。また、先輩の蹴りや体の柔らかさを見ると非常にいい刺激になります。あんな風になれるのかと思うとやる気も違います。気さくな先輩が多いので練習が終わったあとでも話が弾んで時間を忘れてしまうこともしょっちゅうあります。

テコンドーの試合

テコンドーにも、もちろん試合があります。道場の参加がありレベルも非常に高いです。とはいっても初心者の部と上級者の部にわかれているので、初心者がいきなり上級者とあたることはないです。年齢層も幼児から大人まで幅広く参加しています。体重別に階級を分けるのでたまに身長差や年齢差があったりとなかなか見ごたえがあります。また大会や体重によってはいきなり決勝戦ということもあり優勝も十分狙えます。先日の福岡県大会では男女問わず小学生くらいの試合でも蹴りの応酬で乱打戦になったり、年齢が上がるにつれ今度は技と技の戦いになったりとその試合ごとの味がある戦いが見られました。

テコンドー効果

何よりもまず強くなれます。蹴りが強くなるのはすぐに実感できるでしょう。また練習でストレッチをすることで体が次第に柔らかくなり、より高く蹴れるようになります。それにムダな肉がおちて引き絞まる効果もあるので男女問わず参加できます。

最後に

参加したい人は普通に運動できる格好で体育館にいれば練習できます。現在1年は25人います。まだ技術面で差がないので気楽に参加できると思います。もし少しでもテコンドーに興味を持ったならとりあえず体育館の方に来てください。歓迎します。



保健室で垣間見る最近の九大生

まる やま とおる
丸 山 徹

六本松の保健室に勤務するようになってはや2年が過ぎた。思えば確かに4半世紀前、間違いなくこの六本松の「教養部」の門をくぐった筈なのに学部に進学してからの記憶は多々あるものの（部活との両立はとて無理だとか、医者を目指したのは間違いだったとか、否定的な感慨や記憶のみ）、悲しいことに「教養部」の記憶は殆どない。したがってこの保健室にお世話になった記憶は当然ない訳である。

しかし現在週2日六本松の保健室に勤務していると、今の九大生の生態が自ずと見えてくる。第1に今の九大生は（時代の流れで当然ではあるが）、我々の頃よりはるかに流行に敏感でセンスもいい。我々の時代にあった「いも九」なる言葉は今は死語と化しつつあるため、その名を冠したお菓子を自ら売りつつ九大はそのアイデンティティーを確認しているのだろうと勝手に解釈している。確かに「九大生ここにあり」と頼もしくなる学生さんは今でも多い反面、全体的には最近の九大生のコミュニケーション能力の不足が気にならないでもない。

保健室に入って来るなり、「かぜ!」、「くすり!」と単語だけ連発する学生さんがよくいる。「それって不診投薬なんだけど……。」と内心思いつつ（患者さんの言うがままの医療行為を条件反射的に行うことが最良の医療ではないことを知ってもらう意味もあって）、決まり切った問診から始めていく。問診の中で文章としての会話が弾んでくると一安心するが、一般

病院であればそのような学生さんは受診の仕方也不知道患者さん、病院とのつきあい方が下手な患者さんとして体よくあしらわれてしまいかねない。怖い外来部長さんなら即、追い返される。大学のキャンパスは授業でも、ゼミでも、論文審査でもトークバトルの世界だろうに、そのような単語連発型の学生さんはどのように過酷なバトルを生き抜いているのだろう。

保健室のドアをほんのちょっと開けて中を垣間見た後、入るか入るまいか迷う学生さんもいて、ちょっと可愛い。こちらは初めて保健室を利用する学生さんに多いタイプである。確かに保健室のドアには「ノックは無用です」と書いてある。だから余計入室に抵抗があるとすれば保健室としても考え物である。中を見て安心したのか、「えっー、おばさんじゃない!」の一言。確かに高校の保健室を想像すると、いかにも優しそうな定年近くの女性の養護の先生がいたりする。彼らの目からすると、大学の保健室で医師が医療行為をしたり、カウンセラーが長時間カウンセリングをしたりする光景は間違いなく新鮮に映るのだろう。

体脂肪を測定したり、健康雑誌を見に来室する学生さんも多い。こちらはいずれも保健室の常連さんたちである。せっかく来てくれるので最近の九大の様子でも聞こうとするとスッと身構えられる。自分の両親以外の年輩の大人と話す機会は、今の学生さんにはほとんどないのかもしれない。こちらそっちのけで体脂肪を測定して一喜一憂する学生さんたちをよく見かける





ので、ほんの一言アドバイス。保健室にある体脂肪計はインピーダンス法で体脂肪を計測している。からだに感じない程度の僅かな電流を両足底部に流して、水分と脂肪分の電気の通り難さ（インピーダンス）の違いを利用して体脂肪を推定するため、足底の汗のかき方や膀胱内の尿量などにより測定誤差は簡単に生じる。したがって体脂肪が気になる学生さんは、体脂肪計ののっかるだけでなくウエスト周囲径（体脂肪計では評価できない内臓脂肪が推定できる）や、body mass index（BMI：身長と体重から簡単に計算できる）なども知っておこう。通常、物事の評価には絶対的な基準があることは少なく、またその結果だけを単純に信用するべきでも勿論なく、複数の評価基準があって、それぞれの利点と欠点をふまえて総合的に判断する必要性を無言のうちに説いている……なんと教育的な体脂肪計だろう。

今日も九大生は放課後、携帯のメールで待ち合わせ場所を確認しながら夜の六本松に消えていく。語り明かさばかりの濃厚な友人関係の中で過ごした我々の頃には想像もつかないような、互いを拘束せずにしたたかにエンジョイするスマートでシュールな友人関係……、羨ましい反面一抹の寂しさも感じる。「いも九」である我々の時代は、今の学生さんより何倍も何でも



お互い（所謂ガチンコで）話し合い交流があったんだから、と妙に強がり納得して今日も保健室を後にする。

学生さんには少々耳が痛い部分もあったかもしれませんが、要はお互い大人として、対等の立場で学生さんと保健室で交流したいというわれわれ保健室スタッフの日頃の気持ちをご理解頂けたらと思います。保健室は学生さんや教職員の方々を応援する組織ですので、どうか気楽に利用して下さい。

写真のように健康雑誌を取り揃え随時血圧や体脂肪測定が可能です。最後に保健室でも対応困難な状況になった時（病院への紹介状は勿論お書きしますが）のために、上手な病院へのかかり方を扱った本を参考までに挙げてみました。



参考図書

- 1 近藤元治：医師からの助言－医療との上手な付き合い方。京都新聞社、1993年
- 2 河野友信：病院に上手にかかる法－よい患者・悪い患者。講談社、1994年
- 3 伊藤三弓：いまなら間にあう本音の診療室。グラフ社、1998年

追記：本稿は私の偏った九大生観察に陥らないために保健室勤務の栗巣京子保健師、山崎春美事務補佐員により校正脚色されたものです。従いまして（世代は三人まちまちですが）私がお二人の日頃の感想や意見を代弁して寄稿させて頂いたことを付記します。

（健康科学センター）



基礎化学科目の教育について

かわとうとしお
川東利男

最近行われた全学教育科目の「学生による授業評価」アンケートにおいて、基礎化学結合論の授業に対する学生の評判がよくないという結果が出ています。アンケートには学生の正直な声が見えています。授業する私たちはその結果を真摯に受けとめ、教育改善に気を配っています。授業アンケート結果のまとめに尽力された全学教育自己点検・評価委員会と大学教育研究センターの方々に敬意を表したいと思います。

学生・教官を問わず本学の基礎化学教育を心配されている方々に、アンケート結果に対する冷静な対応を願って、その科目の共通シラバスを草稿した立場から現状を説明したいとキーボードをたたき始めました。

1. 授業内容の評価について

授業内容をよく理解できていない学生の割合が高いことが問題になっています。そこで思い出すのは私の先輩教官が、その科目ではありませんが授業アンケートを記名で取ったときのことで、講義の時間内に仕上げ提出するレポートの採点結果では最高の成績評価を受けた複数の学生が、アンケートでは「まったく理解できていない」と記していたのを見せていただきました。授業アンケートが、学生の学期末試験勉強の前に取られたことも見逃せません。平成13年度前期実施のアンケートによりますと、ほとんど理解できていない学生の割合（最高68%、最低33%、平均54%）と、予習復習をほとんどしていない学生の割合（最高73%、最低27%、平均58%）はよく一致しています。基礎化学結合論では自習勉強しないと理解できない内容を教えていることがわかります。少なくとも基礎科目の授業では「教官の教育にかかる時間が長いほど教育効果が上がる」という確かな感じを私はもっていますが、それにも限界があります。アンケートの結果を素直に解釈すれば、講義の度に学生に予習・復習をさせることが問題解決に繋がるように思われます。そのことに関しては後で触れるとして、その前に、授業を受けている学生の質問と教官の答を想定してみましょう。

「原子番号23番の元素の名前を教えてください」

「それはバナジウムです。わかりましたか？」

「はい」というのは学生・教官両者にとって簡単なことです。このような、授業に出なくてもすぐに答が見つかる質問は実際には出ませんが、わかりやすい例としてあげました。次の例は如何でしょう。

「元素の周期律をどう理解したらよいか教えてください」

「それは原子の中の電子の状態を波動方程式で表現できることで理解します。わかりましたか？」

「はい」とはなかなかいきません。つまり、物理学者ファインマンが述べているように、「名前を知っている」ということと「理解している」というのは別物です。ひもの先に錘をつけてぐるぐる回し、錘を電子、ひものを引っ張っている自分を原子核にたとえて原子構造を語る分には、学生の理解に問題はあまりありません。しかし、それでは元素の周期律や化学結合など化学の本質を理解することはできません。そこで、運動している物体の二重性とか、波動関数などが「大学の化学」の授業に出てくるのです。自然を正しく理解する方向を示したシュレディンガーら偉大な科学者の式が授業で紹介されます。詳しい式の展開は授業で習わなくても、学生にはその名前が象徴的に受け入れられて、「シュレディンガーの波動方程式から授業がわからなくなった」ということになるようです。言い方を変えると、授業内容を理解していなかったことに、シュレディンガーという人の名前がついた式が紹介された頃気がついた、ということかも知れません。基礎化学結合論の共通シラバスには「量子化学的なものの見方・考え方の理解を目的」とし「化学の基礎となる問題を理解する力をつけます」と記されています。この科目を修得して自然理解の力をつけるには高校レベルから一歩抜け出す努力をし、飛躍的な進歩をすることが必要です。波動方程式の紹介はこの授業では不可欠であると思います。勉強しない学生が「わからない」とアンケートに書くのを重要視してシラバスを書き換え名前を覚える式の授業に転換するか、これまで通り理解の方法を探る授業をするのか、いずれにしても全学的な支持と協力が必要に思えます。

2. 教官の立場と学生の事情

基礎化学の授業を担当してきた立場上、大学の基礎教育に関する集まりでいろいろな方からお話を伺う機会があります。その際、基礎科目の授業を担当しておられない方は、「その科目を勉強することがいかに有用で大切であるかを学生に伝えさえすれば問題は解決する」と受け取れる程に学習の動機付けの重要性を強調されるのが普通です。一方現場で教壇に立たれている先生は、「誰にでも理解しにくいことをどうしたらうまく教えることができるか、具体的な教授法が難しい」と話されます。基礎教育の現場で、第1回目の授業では特に時間をかけて、その科目を勉強する意義について話をしない人はいないのですから、当然問題は其の先にあります。教育を語る場では精神論の話ではなく、例えば「基礎化学結合論の授業は高校の科目分類で言えば物理学の授業に近い、という一言を始めに話しておくだけで、学生の心構えが違い理解度があがる」というような教授法のヒントを交換したいのです。議論に熱が入ると「この際、勉強の動機付けは重要な課題ではない」などという不用意な発言がベテラン教官から飛び出し、誤解が混乱を招くのは悲しいことです。

学生に化学の予習・復習をして貰う方法がないわけではありませんが、それは単に学習成果の応用価値の力説で済む問題ではありません。あえて具体的な方法の例はあげずに、ここでは別のことを述べたいと思います。六本松地区に研究室を構えていると専門の違う先生と親しくなる機会が多々あります。物理学の教官が「自然の理解の根幹に物理学があるのだから早くその基礎を学ぶことが肝要」と言われることに私は賛同します。「数式は自然を正確に語る言葉として有効なのだから、数学を早めに勉強しておかないと意志疎通に困る」と数学の教官が話されます。英語の教官は「語学はすぐに学力低下してしまうから毎日勉強しないといけない」、ドイツ語の教官は「国際文化交流にも関係する第2外国語の学習は初めが肝腎」、なるほどすべてその通りだろうと思います。その他多くの先生が「理系の学生でも大学初年度には自分の専門から離れた文系の本を沢山読んで、広い心を」というお考えのようです。それら1つひとつが頭の中をよぎるとき、基礎化学の講義毎に学生に予習・復習を強要する力も鈍ります。アンケートを取るようになった前後から基礎化学結合論担当の機会がなかった私とその科目の授業をしても、試験勉強前に講義内容をほとんど理

解できていない学生の割合が5割、その後の勉強により試験に合格する学生の割合が9割、という平均的な数値を改善できる良策を見つけるのは困難なことです。

3. 教官の評価について

授業には、そこで扱われる学問の内容を越えた「する側と受ける側的人間的な繋がり」があります。決められたことを決められた通りに教えていればよいのであれば、全国的に評判の高い講師によるビデオ授業に頼るべきだという意見もあります。基礎化学結合論の講義で学生の評価が特に悪いとされる教官が、化学結合論（量子化学）の専門家ではなく、大学の研究室の滞在時間が短く化学以外の趣味にうつつを抜きし学術研究はしない、のであれば案外簡単に問題解決するかも知れません。しかしもし、その教官が量子化学の専門家であって、多くの専門家の注目を集めている優れた研究論文の著者であったならどうでしょう。さらにもし、教官により評価を与えなかった受講生集団の中から将来、化学関連学会を代表する賞の受賞者が出た場合はどうでしょう。「そんなことは」の後に続く言葉を発する前に、大学学部教育、大学院教育についても立場を変えて考えてみれば、学内で自己点検評価の基準にしようとしていることと外部社会が大学教官や学生に期待していることには、少しずれがあるかもしれないという思いも起きます。どの先生が良くてどの先生が悪いのか、私の好きな宮沢賢治も、多分判定できなかつたと思います。

将来究極の教授法なるものが見つかって、1つの科目には1つの教科書しかなく、シラバスには授業内容が事細かに記される、さらに、板書の内容が最高のものに整理されてアナウンサー吹き込みの講義CDが普及する、それで、教官の悩みもその必要性さえもなくなる事態が起こり得るとしても、それは私の想像を越えた未来のことです。教官の多様な教育思想やその現れである多様な教科書は統一できるのでしょうか。

このような困難な現実を素直に認めつつ、講義内容の標準化や成績評価基準の平準化を目指さなければならぬのですが、九州大学では、多くの教官が情熱を持ってそれぞれの教育思想を基にそれぞれの教育を展開しています。学生はそれら教官の人となりを含んだ授業全体からいろいろなことを学んでいます。どの様な場合にも授業アンケート結果の慎重な解釈が望まれる所以です。

(理学研究院)



六本松に帰る

ほしこなみ
星子奈美

私は、今年の4月から附属図書館六本松分館で働き始めたが、それまでの6年間は九大の学生であった。つまり、6年前に日々通っていた、懐かしのキャンパスが職場になったというわけだ。

とはいえ、ここ数年六本松を全く訪れていなかったということはないので、「こんなに変わっていたとは！」と驚くことはそれほどない。図書館に関して、インターネットの普及などに伴って、資料検索システムやコンピューターの台数に大きな変化があったはずなのだが、その変化自体に自分がなじんでしまっている。だから逆に、少し昔の記憶をすっかり忘れていてことの方に驚く場合が多い。

忘れてるのは外的な環境だけでなく、当時の自分自身の行動や考え方についても同様だ。だが、毎日六本松で生活をしていると、やはりじわじわと6年前の、大学に通い始めたばかりの自分、特に図書館にいた時の自分の姿を思い出すものだ。

現在の学生の方たちも同じかもしれないが、六本松分館は、当時の私にとって、授業の合間の空き時間を過ごすための場所であった。この数年主に利用していた箱崎の中央図書館は、調べものや相互貸借の依頼など、何かしらの利用目的があるときに行く場所であったが、六本松分館には用のあるなしに関わらず通っていた。まだ研究室に所属しておらず、図書館以外に学内での居場所がなかったからだ。

とりあえず行った図書館で何をするか。私は書庫に入っていたことが多いように思う。カウンターで書庫の本はどうしたら使用できるのかと尋ねたとき、「ご自由にどうぞ」と言われて非常に驚いたことを、比較

的ははっきりと覚えている。関係者以外立入禁止のイメージの強かった書庫に、自由に入ることができるのは、当時の私にとって画期的だったのだ。でも、読んでいたのは古い珍しい雑誌の類であったから、暇つぶしの域を超えることをしていたわけではない。

先程から、「空き時間」「居場所」「暇つぶし」といった単語を用いているのは、六本松で過ごしていた時期に時間を持て余していたという印象があるからだ。それは、自由を満喫する時間というよりも、何か行動しなければいけないと思いつつ、何をしたいのか分かっていないという不安定な時間であった。故郷を離れて見知らぬ土地にやってきたこと。まだ専攻したい学問分野も、なりたいた職業も決まっていなかったこと。それらについて常に悩んでいたわけではないが、時にふと湧き上がってくる、確固とした足場のない気分があった。書庫の中で1人、雑誌のページを繰りながら、私はそんなモラトリアムの曖昧さを実感していたような気がする。

こうした六本松での図書館経験が、図書館員という職業を選択するきっかけとなった、と言える、持て余しがちな時間も無駄ではないという教訓にもなるだろうが、そう断言するのは正確ではない。先に述べたように、6年前の自分が何を考えていたのか、ここところすっかり忘却していたのだから。しかし、忘れていたにも関わらず、結果として、図書館員になった私が現在六本松分館にいるという事実が、かえって不思議な巡り合わせを実感する要因になっている。

母校が引き続き職場になれば、慣れきった環境の中で、社会人になった新鮮さを感じないかもしれないと思っていた。しかし、大学1年生だった自分が過ごした場所で、社会人1年生をやっていることで、当時の緊張感や、今よりちょっと若かった自分を追体験できるのは幸運だ。また、そんな自分を思い出すことで、現在六本松分館の中心的利用者である学部1、2年生の状況も少し理解できるかもしれないと思う。ブラウジングルームで漫画を読む彼らは、書庫にこもる私の姿と妙に重なって見える。 (六本松分館)





私とスポーツ史研究

あきもと しのぶ
秋元 忍

4月16日付で、大学教育研究センターの講師に着任いたしました秋元忍です。「スポーツ科学」の1分科学である「スポーツ史」が私の専門です。授業は健康・スポーツ科学科目を担当しています。

私の研究の出発点は、学校体育に対する違和感にありました。特に、課外体育としての部活動における精神面の強調は、私にとって受け入れがたいものでした。中学生の頃の体験は忘れられません。野球部員は全員丸刈り。女子ソフトボール部員は先輩が見えなくなるまであいさつ。水泳の県大会で、レース前に緊張をほぐそうと漫画を読んでいた友人が、教員から「遊びに来ているのではない」と怒鳴りつけられ、殴られる、等々。これらのことをおかしいと思うのは自分だけなのか。こうした違和感はずっと私の中に残ったままでした。そして高校、大学でも学校でスポーツを続ける中で、私のような学生がスポーツを遊ぶ、心から楽しむということと、学校がスポーツに見いだしている価値には、相通じるものが全くないような、何か大きな隔りがあるのではないか、と思い至ったのです。

こうして私は、スポーツとはそもそも何か、ということに興味を持つようになりました。専門的にスポーツについて研究してみようと決意したのです。なかでもスポーツ史は、とても魅力ある領域に思えました。「遊び、気晴らし」であったスポーツが学校に導入され、教育というフィルターを経由することによりそれにふさわしい意味づけが求められるようになり、まじめで真剣な教育の手段となったことは、スポーツ史における「近代」に固有の出来事の一つにすぎない。こうした知見を得たときに、私の違和感の原因が、はじめて理解できたように思えたからです。私の体験には、このような過去が忍び込んでいたのです。

九大での健康・スポーツ科学科目も、スポーツの現代的実践の場の1つにほかなりません。スポーツの「いま」である授業実践と、スポーツの「これから」に関する歴史研究を通して、スポーツの「これから」を考えていきたいと思えます。

(大学教育研究センター)



自己紹介に代えて

いしかわ たくみ
石川 巧

特に好んでそうしたわけではないが、親許を離れてからの私は絶えず引越しばかり繰り返してきた。同じ場所に住み続けるのはせいぜい3年で、気がつけばもう10回以上あちこちを転々としている。また秋田で生まれ東京で学生生活を送った自分がいま福岡にいることを考えると、その移動は「西へ西へ」という方向性をもっていったこともわかる。前任校があった山口を含めて、それぞれの土地に住み始めた時には「よし、この街ですと暮らすぞ」という気持ちで新しい空気を吸い込むが、周囲の光景に慣れてくるとなぜか引越せざるをえない状況に至ってしまうのである。

そうしたデラシネ性は研究のあり方にも反映している。大学では国語教育を学ぼうと考えていたが、別のゼミの先生に惹かれて近代日本文学を専攻するようになった。卒業論文は森鷗外で書いたが修士論文は川端康成に走り、博士課程では劇文学研究に食指をのぼした。これまでにまとめた論文をみても明治初期の宮崎湖処子や草村北星から現代の村上龍、島田雅彦まで、なんだかもう支離滅裂である。そこにみえるのはあれもこれもといった感じで拡散した好奇心の残骸だけである。

しかし九州大学に赴任して以来数ヶ月が経った今私のなかにはひとつの大きな転機が訪れている。不惑の40代が迫ってきて尻に火がついたこともあるだろうし、子育てに追われる毎日のなかで限られた時間を大切に使うようになったこともあろうが、とにかく、私は腰を落ち着けて体系的な研究に取り組みたいという衝動に襲われている。その良し悪しはともかく、狭くて深い奈落の世界を覗き込みたいという意思が芽生えてきたこと自体とても新鮮な出来事に感じられる。

将来の研究者をめざして世界各国から集う大学院生、全学共通教育の場で会うことになる各学部生のみなさん、そして同僚諸氏の方々と活発に応答し、刺激にみちた研究・教育環境に腰を落ち着けること。そして、腰を落ち着けたままゆっくりとひとつの方向を見定め、移動していくこと。それが今の私の課題である。よろしくお願い致します。(比較社会文化研究院)

新任教官自己紹介



野 心

う え だ よ し み ち
植 田 好 道

昨年度の記事を参考に見せて頂いたのですが、同じ数理の長友さんの「野望」というタイトルの記事にすっかり度胆を抜かれてしまいました。

前口上が長くなりました。4月に広島大から移って来ました。長友さんは九大が（学生としての在学も含めて）5校目とのことですが、私も学部、大学院、助手と全て違うところだったので3校目になります。

（数が違う??私は計算が下手なのですが、でも大丈夫、正しい数です。）

さて、「野望」に代わるタイトルですが、私は一文字変えて「野心」として見ました（少し悪のり??）。昔、雑誌に目を落としていると「Boys, be ambitiousの ambitious は「大志」と訳されるが、本当は「野心」と訳すべき……」という記事に出会った記憶があります。おそらく「野心」という言葉のニュアンスは日本人には合わないのでしょう。けれども、研究では「大志」のような生半可なものではなく「野心」を持つことが案外重要なことのように最近感じて来ました。付け足しになりますが、私は数学の中でも「作用素環論」という、とっても素敵な(!)分野の研究をしています。まあだいたい量子力学の誕生に刺激を受けて（コンピュータの生みの親(?)として有名な)フォン・ノイマンが始めた量子の世界を記述する「数論」です。作用素環論は私のような鈍才にも生きて行く場所を与えてくれる大変心の広い分野のようで、それに悪のりした私は流行に捕われない（ほんの些細なことでもいいので、兎に角）新しい局面を切り開くような仕事をしたいという「野心」を持っています。「野心」は「野心」のままというのが情けないのですが、まあ夢を見るのは勝手ということで……。

広島大では教職員の草野球チームに所属していたのですが、九大に移ってからは未だ何も始めていないのが残念でなりません。仲間に入れてくれるスポーツを楽しんでおられる方々がいたら、声をかけて下さい。よろしくお願いします。（数理学研究院）



ロシア語を学ぼう

さ と う ま さ の り
佐 藤 正 則

ロシア語はまったく人気がない。他の言語と比べてロシア語を選択する学生数はあまりにも少ない。

「ロシアは暗い」、「ロシア語は難しそう」、「変な文字を使っている」などといった声がしばしば聞えてくる（そんなことを言う人に限って、「ロシア」というと「ピロシキ」しか連想できなかつたりするのだが）。でもちょっと待ってほしい。実はロシア語の社会的需要は急激に増大しつつあるのだ。

近年、ロシアと日本との間の経済的、人的交流は急速に進展している。北海道や日本海側では既にロシアとの交易なくしては地域経済が成り立たないほどになっているし、街を歩いてロシア語の文字に出くわすことも珍しくない。こうした傾向は今後さらに強まってくるはずだ。日本において今ほどロシア語が理解できる人材が求められていることはない。ロシア語を勉強すれば、貴重な人材としてこれからの日本社会のさまざまな分野で活躍する道が開けてくるにちがいない。

また、ソ連崩壊後も国際社会におけるロシアの重要性が低下したわけではない。真に国際的な視野を身につけるためには、アメリカや西欧だけではなく、イスラムと並んでロシア・東欧に目を向ける必要がある。

第1、第2外国語で別の外国語を選択してしまったという諸君も決して手遅れではない。箱崎キャンパスの言文分室で「速修ロシア語」が開講されており、ロシア語の基本的な文法事項を学ぶことができる。

21世紀の日本で真の国際人になりたいと思う諸君、自分に先見の明があると信じる諸君、時代の趨勢を先取りしてやろうと野望を抱く諸君、是非ともロシア語を学んでほしい。

新任の教師が多少頼りないけれど。

(言語文化研究院)



ご挨拶

ときた まさゆき
 鴫田 昌之

4月1日付けで三重大学工学部分子素材工学科から九州大学大学院理学研究院物理学部門に赴任いたしました。博多は学生の頃から憧れの地でしたから、この度の転任を喜んでおります。

私の専門は高分子物理学で、現在は「ゲル」と呼ばれる物質状態の構造や物性を実験的に研究しています。ゲルというと皆さんはどのようなものを思い浮かべますでしょうか。豆腐、蒟蒻、心太などの日本古来の食品は蛋白質や多糖類から作られる典型的なゲルです。このような食品のみならず、私たちの身の回りにはゲルを利用した様々な商品があふれていることは、テレビや新聞などのコマーシャルを見ていると良くわかります。また、生化学の研究室や工業の現場などへ行くと、物質の分離や精製にゲルが使われていることに気づきます。しかし、ゲルの構造や物性に関して、物理学のメスが入ったのはそれほど昔のことではありません。また、この十年ほどで分析技術や光学技術が著しく進歩しました。このような技術の進歩によって、現在ではゲルの構造を、ある限られた空間スケールではあるにせよ、直接的に観察できるようになりました。これからは、このような観察結果と理論の予測との対応関係を明らかにしていくことが、研究の重要な課題となっていくのではないかと感じています。

生命の様々なステージで観測される現象にも、ゲルの研究で得られた成果を基に解釈される現象が数多くあります。生命は太古の海中で発生したと考えられています。水中生物が海から陸に上がるときに用意した水の「容器」が膜とゲルであるといわれています。生命科学の分野においては、これから容器としてのゲルのみならず、機能発現のための「場」としてのゲルの研究が進んでゆくのではないかと考えています。

このように、研究がダイナミックに転換してゆく時期に、九州大学で研究する機会を与えて頂いたことに対し、深く感謝いたしております。科学の発展と九州大学の発展のために全力を尽くす所存しております。どうかよろしく願いいたします。(理学研究院)



ごあいさつ

ふくとめ るみ
 福留 留美

2002年4月1日付けでアドミッションセンター学生相談研究部門に助教授として赴任いたしました。普段は本館1階の学生生活・修学相談室におります。わたし自身が本学の教養部生だった頃(まだ市内電車が通っていませんでした)、転学部を希望して友人数名と連れ立って相談室を訪れた経験があります。そんな昔、自分が教官としてここに戻ってくるなどということは夢にも思いませんでした。ですから着任当初は六本松周辺の変わり様に戸惑いながらも、遠い青春の日々とその後の来し方を思い、感慨深いものがありました。

さて、わたしの専門分野は臨床心理学です。大学での学生相談や一般の人々のカウンセリングの経験を通して感じることは、「もの」や「こと」に対する努力と「ひと」に対して求められる努力の型は別ものということです。前者は「物作り」や「仕事や勉強」の領域で、後者は、「自分や他人との関係」に関する領域です。前者はどちらかというとき一定の目標設定が可能で、集中した努力をすれば、それなりの結果や答えを手に入れることができますが、後者の場合、目標を立てるのが難しく、答えの幅が広く曖昧で、時には努力放棄を決め込んだ方が奏功を見えるというようなパラドックスに満ちた領域です。友人関係や男女の恋愛関係然り、親子関係然りです。人生を辿る上で、ふたつが別ものであることを認識していると、少し歩きやすくなる気がします。

今からさまざまな人間関係の経験を積み、成長していられる若い人たちに、授業などを通してこのようなメッセージや心理学からの興味深い知見を伝えたいと思っています。どうぞ、よろしくお願い致します。

(アドミッションセンター)



梨花女子大学校 (3頁参照)

あ	と	が	き
---	---	---	---

戦前からあった岩波新書に続いて中公新書が創刊されたのは1962年11月で、その第1冊目は桑原武夫編『日本の名著』でした。ここでは、福沢諭吉から丸山真男にいたる、明治維新から第2次世界大戦期までに哲学、政治・経済・社会、歴史、文学論、科学の分野で刊行された50冊が選びだされ、それに解説が加えられています。この本はいまでも増刷され続けているので、いくらかは読まれているのでしょう。

しかし、最近の大学生のなかでは—少なくとも私の知っている範囲では—、そこで紹介されている本の著者名や書名を知っている人もきわめて僅かになってしまいました。うへの50冊のうちの何冊かが入れ替わることになっても状況は大きく変わらないでしょう。姉妹編である河野健二編『世界の名著』で取り上げられた本についても同じことがいえそうです。大学生の

学力低下が話題になっている昨今ですが、東西の古典も学生にとって無縁のものとなってしまっているのです。ひょっとすると、21世紀というのは、人類がこれまでに蓄積してきた知的な遺産の多くを必要としない社会をつくり出すのでしょうか。

古典に親しむということがなくなりつつあるだけではありません。人々は社会の目まぐるしい変化への対応に追われて、何が基本的に大事であるのかを考える暇を失っており、残念ながら、大学もその例外だとはいいきれないようにみえます。しかし、混迷の状況だからこそ、初心に帰って、学問とは何か、大学とは何か、あるいはより遡って、人間とは何か、社会とは何か、といった問いから出発しなければならないのではないでしょうか。そういえば、本誌題名は「根源」を意味していました。(Z)

radix (ラーディクス) No. 33 (九州大学全学教育広報)

発行日 2002年9月30日

発行所 九州大学大学教育研究センター

〒810-8560 福岡市中央区六本松4-2-1

電話 (092) 726-4525・4526 (企画掛)

FAX (092) 726-4530